

石井式漢字教育革命

あとがき

「漢字とわたし」

漢字書き取りが第一の苦手

正直に言って、私は、大東文化学院で、岡井慎吾先生について説文学を学ぶまでは、漢字の書き取りが最大の苦手であった。とりわけ、小、中学校時代には、漢字の書き取りほど悪い点を取った科目は他にない。だから、漢字の書き取り」という言葉ほど、耳にして不愉快になる言葉は他になかった。

今でも多くはそうだが、漢字を書く力は、一つの漢字を何度も繰り返し繰り返し書く練習をすることの量の多寡がこれを決する。書く練習をしない限り、漢字を書く力は絶

対につかない。ところが、私は、この反復練習がまことに嫌いだった。いや、練習なんてものではない。国語のノートを取るということさえ嫌いで、中学時代、ノートを持たないことで有名でさえあった。中学時代、定期的にノートを提出させ検閲する国語の先生があった。私は、この先生に「私はノートを取らないので提出しません」と断わった。そのくらい徹底して書くことを嫌ったのだから、『書く力』がつくはずがなかった。今、中学卒業記念アルバムの末尾にある学友全員の名を書きを見ると、『イシイサオ』と、私だけがただ一人カナ書きをしている。これを見ると、当時の私はよほど徹底して漢字を嫌っていたんだなあ、改めて感慨深く思い出す。

とは言うものの、『漢字を読む力』は抜群に強かったのである。小学校に入学する前から、本を読む楽しみを覚え、学友のだけれども多くの本を読んでいたの、学校で初めて学習する『新しい漢字』でも、私に読めないものはまずなかった。

だから、中学に進んで初めて漢文というものを学ぶようになった時、多くの学友たちが「読めない漢字が多い」ということで、漢文嫌いになっていったのに反して、私は漢文が大好きになってしまった。漢文では、漢字の書き取りなどさせない。ただ、読めさえすればよいのだから、読むことが好きで、それが得意な私には打ってつけの学科だったわけである。このことが、当時、漢文において最高学府であった大東文化学院に進学させる動機になった。つまり、私に現在の道を歩ませる理由になったのである。

しかしながら、岡井先生の説文を学ぶまでは、漢字を書く能力は学友に比べてひどく劣っていた。当時の大東文化学院は、今の大学の専門課程で専攻している漢文の原書を六年間専攻させるという特種な学校であったから、さすがに漢字を書く能力も自然と伸びていったわけだが、ほんとに『漢字を書く力』がかったのは、岡井先生の説文を学んでから後のことである。

漢字は“文字”ではなく“語”(ワード)“

漢字は字数が多く、しかも字形が複雑なので、学習負担が多い、と言われている。今まで、西欧の学者たちは、漢字のそれらの点を理由に、前時代的な文字だと決めつけているが、それは正しくない。

漢字は、ローマ字と同じく“字”と呼ばれているために今まで誤解されてきた。漢字の“山”や“川”に当たるものは、英語なら“mountain”、“river”である。つまり、漢字は“字”(アルファベット)“ではなくて、実は“語”(ワード)“なのである。

では、漢字のアルファベットに当たるものは何かと言えば、それは“字画”であろう。漢字は、㇀・一・ノ・の五つの字画によって作られている。だから、漢字のアルファベットは、最も字画が簡単で、数も少ないのである。

漢字が“語”であることを知れば、それが二千、三千あっても不思議はない。どこの国でも、二千や三千の“語”を学習させている。漢字の学習だけが特別に大きい負担になっている、というのは明らかに誤解である。

その証拠に、二十六字のアルファベットを使用している西欧諸国の小学生たちは、毎日、学習時間の半分以上を“読み書き学習”に当てているのに、教科書が読めるまでに至らない子供が二、三十パーセントもいる、と報告されている。

漢字は、俗に“六書”^{りくしよ}と呼ばれる体系的な造字法によって作られているものであるから、その構成について理解させ、体系的、論理的に漢字を学習させるようにするならば、漢字の学習は楽しいものになり、容易に記憶できて、しかも忘れがたいものになるのである。

ところが、これを従来のように、ただがむしやらかな反復練習によって丸暗記するように

要求するものだから、漢字学習は苦勞ばかり多くて効果が少ない学習になってしまうのである。こういう学習は、悪いことに、折角覚えたと思ってもその記憶は長続きしない。

今まで、だれもがこういう学習を余儀なくされていたので、漢字は悪評を被っていたのであるが、それは決して漢字の罪ではない。漢字について無知な教師たちが、愚かな学習を強制したから、学習が無味乾燥なものになり、そのため、私のような『漢字拒絶』の子供を作ってしまったのである。

思えば、私も長い間不当に漢字を憎んで来たものである。ほんとの漢字学習をすれば、楽しく学習できて、しかも、力がつくものを、その正しい学習法を知らないばかりに、漢字を憎悪してきたのである。漢字こそいい面の皮である。

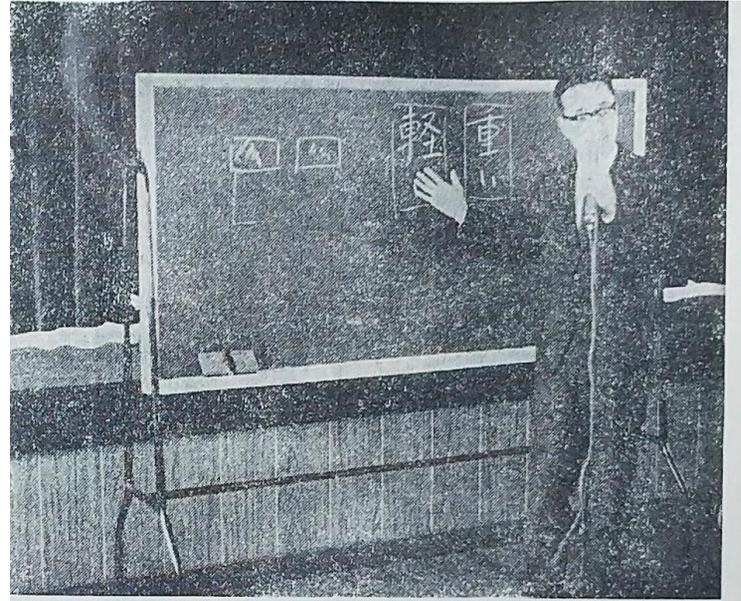
岡井先生から、漢字の構成法を学んだ私は、私のような愚かな道を歩む者は出来たら私限りにしたい、と思ひ、これを私の生涯の道にしたい、と思うようになった。

しかし、第二次世界大戦は、その希望を中絶させた。幸い、いくつかの死線を乗り越えることが出来て、教壇に立つことが出来た時、今度こそ正しい漢字教育の樹立と普及のために、精いっぱい努力をしなければ、と思った。

子供たちから学んだ真の教育法

私の研究が一応まとまって、初めて、それがマスコミに取り上げられたのは、昭和二十七年であった。今からちょうど四分の一世紀昔のことになる。朝日新聞の東京都下版に、トップ記事、四段抜きで、『石井主事、近く研究成果を発表』という見出しで紹介されたことが、今でも昨日のこのように思い出すことが出来る。

私は、その翌年（昭和二十八年）、指導主事をやめて、それを実践して証明するために、



著者講義する漢字教育の幼児

小学校一年生の担任教師になった。初めは数年で済むと思ったこの実践は、昭和四十二年まで、十四年間続いた。

教育は、実際に教育してみて初めて理解できるものが多い。頭の中で良いと思ったことも、実践してみると少しも良くない場合が意外に多い。反対に、つまらぬと思うことが、意外に効果を挙げることがある。ともかく、考えては実

践に移し、実践しては考えることが絶対に必要なのである。

真の教育法は、教える子供たちから学ぶものだと思う。私は、十四年間、教え子たちから実に多くのことを教えられた。「漢字がかなよりも覚えやすい」ことをはじめ、私が発見した新しい事実は、結局のところ、皆教え子たちに教えられたものである。

昭和四十二年、子供たちといっしょに運動場を駆け回ることが負担に感じられるようになった私は、小学校教師の職を退いた。しかし、今でも、私の研究所に通って来てくれる子供たちに、必ず毎週二日だけは都合をつけて、子供たちを指導することに励んでいる。

今は、三歳から四歳、五歳という幼児を相手に、漢字教育を試みているのであるが、なかなかおもしろい問題が次から次へと出て来る。論語の素読を始めたが、幼児は音読することに驚くほど興味を持つものであることも教えられた。

この子供たちは、朝起きると、まず、論語を取り出して朗読するそうである。こうして

いるうちに、文章が頭の中に入ってしまつて、近頃は、暗誦している子供もいる。こんなると、どんな文章でも、『文章を覚える』能力が著しく高まることも最近わかつた。記憶力も、記憶することの経験によって向上するのである。

また、素読だけでなく、子供なりに内容を理解させることに努力しているが、これも子供なりに理解できるものであることもわかつた。実生活の中に、この言葉を生かして使うので、親がびっくりすることがあるそうである。

幼児の可能性の大きいことは、今は知らぬ者はないと言ってもよからう。しかし、どれほど大きいかは、そしてそれがどこまで伸びるのかは、だれもわからない。こういう幼児と、毎日ではないが、接していられることは楽しいものである。死ぬまで続けていきたいものである。